

キュウリ黄化えそ病（MYSV）対策の推進

■ 綾歌南部胡瓜部会 ■

（中讃農業改良普及センター 片本 格 ○井原里弥）

●対象の概要

中讃管内では、JA綾歌南部胡瓜部会の生産者28戸が、施設における抑制栽培と半促成栽培のほか露地栽培に取り組み、阪神方面を中心に、地元市場にも新鮮で高品質な商品を供給している。

近年、高齢化による規模縮小や栽培の休止は否めないものの、一方では新規参入や後継者の参画も見られる。

●課題を取り上げた理由

中讃管内では、平成21年の夏キュウリほ場で黄化えそ病の初発生を認めて以降、この病気のウイルスを媒介するミナミキイロアザミウマ（以下アザミウマという）の防除対策技術の普及に努めてきた。

生産者に対するこの病害の早期発見と対応についての意識醸成や、抑制栽培後の半促成栽培ほ場への病気を媒介する保毒虫を持ち越さない対策に取り組んできた。その結果、平成30年以降、半促成栽培が終了するまで発症株が確認されない状況が続いている。

しかし、夏季の露地栽培では毎年、近隣産地からの保毒虫の飛来による発生がみられていることから、露地栽培に続くハウス抑制栽培への伝染を防ぎ、さらに翌年のハウス半促成栽培への保毒虫の持ち越しを防ぐことで、慢性的な病害の発生を食い止める必要があると考えられた。



黄化えそ病とミナミキイロアザミウマ

●普及活動の経過

1 ミナミキイロアザミウマの生存調査

平成30年に、管内のハウスにおいて抑制栽培終了後、アザミウマの生存状況を調査した。調査ほ場では、収穫終了後、薬剤を散布して地上部に生息しているアザミウマを駆除している。

調査は、薬剤散布後、抜根と同時に除草を行うことで地上のアザミウマの生息場所を断った上でハウス内の温度を保ち、キュウリの作付け跡に青色粘着トラップを設置しアザミウマの羽化状況を確認した。

2 黄化えそ病防除対策の推進

アザミウマの生存調査の結果を基に、対策の有効性を上げるためのポイントを講習会で生産者に紹介し、防除意識の醸成を図った。

また、アザミウマのハウスでの越冬防止対策の取組事例として分かりやすく図式化した啓発資料を作成した（図2）。

この資料については、ハウス栽培農家に配布し、個別指導を通じて対策の確実な実施に繋げることとしている。



啓発資料

3 令和2年度における黄化えそ病の発生状況と防除対策の指導

1) 黄化えそ病の発生状況

令和2年度の半促成栽培は、3月下旬から定植が始まり、それに合わせて定期的な巡回を行ったが、発病は確認されなかった。

露地栽培では、5月から定植が始まり同様に

定期的な巡回を行った結果、7月中旬までは発病が確認されなかった。しかし、7月下旬には、例年どおり地区東部のほ場で発生が確認されたのを皮切りに、新たなほ場での発生が11月上旬まで続いた。これらは、近隣産地からの保毒虫の飛び込みによる発生のほか、生産者間における人を介しての保毒虫の移動が原因と推察された。

翌年の半促成栽培で発生してしまうと、産地内に蔓延する恐れがあることから、より効果的に対策を徹底させる必要に迫られた。

2) モデル農家の設定と対策の実践を指導

ハウス栽培の生産者に対しては、定期的に訪問し、発生状況の確認と対策の実践に向けた指導を行っている。今回、9月下旬に発病した生産者は、栽培面積が大きいことから、確実な対策の実践に向け、綿密な計画を立てる必要があった。そこで、その生産者を防除対策のモデル農家に位置づけ、ハウスごとに対策の実施計画を立てることを提案し支援を行った。

●普及活動の成果

1) 生産者自身によるアザミウマ発生状況の確認を通じた防除意識の向上

モデル農家となった生産者は、当初、年明けまでキュウリの生産販売を続けたいとの意向を持っていた。一方、以前の生存調査から、ハウス内に入ったアザミウマは、幼虫が土中で蛹となって羽化することが確認されていたことから、まず農家自身の目で直接、その状況を確認してもらうこととした。

キュウリの収穫終了を待たずに、株元に粘着トラップの設置を指導し、アザミウマの羽化を共に確認した結果、モデル農家自身が防除対策の必要性を強く認識し、積極的に作業計画を立案するなど意識の向上が見られた。



防除計画の策定を支援

2) アザミウマの持ち越しを防ぐ対策の徹底

抑制栽培から半促成栽培へのアザミウマの持ち越しを防ぐ対策として、①ハウスを閉め温度を保った状態で、キュウリを枯らし、同時に除草を行う、②できるだけ長く保温状態を保ち、土中の蛹の羽化を促す、③アザミウマを凍死させるためハウスを開放し、残渣の片づけや耕運、施肥、うね立てなど半促成栽培の準備にかかる、④ハウスを閉め、苗の定植に向け畝上にトンネルを設置して地温を上げる、⑤発生初期の駆除を目的とした苗への浸透移行性薬剤の灌注を行ってから定植する、といった具体的な作業内容を提案した。

モデル農家では、12月下旬から計画に基づき対策を実施しており、1月中旬には、全ハウスで対策に着手することができた。その間、定期的な訪問に努めて作業の進捗やアザミウマの状況を生産者とともに確認することで、計画的かつ確実な対策の意識付けができた。

3) モデル農家を核とした地域への波及

今回の取組み（作業体系やポイント）を参考資料にまとめて、JA担当者とともに、すべてのハウス栽培者を訪問し、対策意識の醸成を図った。

その結果、他の生産者もモデル農家を参考に、計画的な取り組みを実施するようになり、点から面への防除対策の波及がみられている。

●今後の普及活動の課題

黄化えそ病についての知識と防除技術を産地内で共有し、個々の生産者が防除技術を確実に実施することにより、産地内での発生、拡大を最小限に抑える活動を今後も継続していく必要がある。

毎年、他産地からの保毒虫飛び込みによる発生はみられるものの、これまでは生産者の高い防除意識により早期発見と早い対応ができており、今後も続けていくことが重要である。今回の活動キュウリ黄化えそ病発生防止策のモデル産地として、県内の他産地へも取り組みが波及すると期待される。